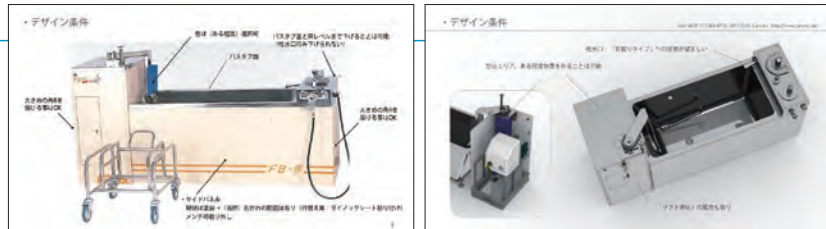


フツラ×Caro

介護用入浴装置（浴槽）

町工場の職人と二人三脚でものづくりに励んできた会社が、初めてコラボマッチングに挑んだ。
開発当時のままだったデザインは、どのように生まれ変わったのか。
そして、コラボの結末は……!?



打ち合わせを重ねて、現状の問題点を抽出していった

「この人たちのデザインを見たい」

「デザインのことはよくわからないんです。デザイン活用の経験が浅い中小企業には、フツラ・代表取締役の加藤洋さんのこの言葉にうなずく方も多いのではないだろうか。

フツラは、介護用浴槽や入浴補助機を開発・製造する会社である。製品はすべて受注生産。加藤さんが図面を引き、町工場の職人が部品を手作りしている。顧客の要望に応えながら、職人の作りやすさを考えて設計してきた。デザインはどちらかといえば二の次だった。

とはいえ、デザインのことが気にならなかったわけではない。同社の代表的な製品が開発されたのが1970年代後半から80年代。構造は進化してきたものの、外観デザインはほとんど変わっていない。壊れにくくメンテナンスしやすいと顧客から評価されている反面、「見た目が古い」という指摘も耳に入ってくる。「デザインを何とかしたい」という気持ちはあったという。加藤さんは、「デザイン導入が進んでいない業

界だからこそ、デザインで差別化できるという思惑もありました。でも、デザインはまったく未知の分野なので、どうすればいいかわかりませんでした」と話す。

ちょうどその時、知人に教えられたのがコラボマッチングだった。2017年9月、人生初となるデザイナーとの面談に、緊張した面持ちで臨んだ。何人かと話した中で、強く印象に残ったのが、Caroの山口英文さんと折山優子さんだった。自社製品の写真を見せると、「この角を取れば一気に雰囲気が変わりますよ」。そう太鼓判を押す2人に対して、「この人たちがデザインする浴槽を見てみたい」と思ったという。シンプルでスタイリッシュな彼らのデザインも、自分たちの製品に合うような気がした。加藤さんは、自分の心の声に素直に従うことにしたのだ。

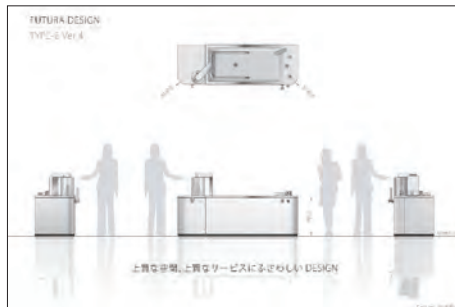
まずは製品リニューアルでコラボ

加藤さんには、少し前から温めてきた新製品のアイデアがあった。そのデザイン開発をぜひ

デザイナーに依頼したい。そう思ったが、デザイナーと組んで仕事するのは初体験で、わからないことが多い。やはり一番の懸念は、「デザイン料にどれくらいかかるか」ということだった。まずは試しにと、従来製品のデザイン改良に一緒に取り組むことにした。

介護を必要とする人が、椅子に座ったまま、リフトを使って入浴できる特殊装置である。図面データをデザイナーに渡し、「外観デザインを施してほしい。色は白で」とだけ伝え、「あとはすべてお任せしました」と加藤さん。デザイン料に関しては、「自分がデザイナーだったらどれくらい必要か」を念頭に置いて交渉。「こちらの想定額にほぼ収まりました。見積もり段階で東京都中小企業振興公社に相談できたのも心強かったです」と加藤さんは話す。

Caroのデザイン案は、浴槽の角に丸みを付けて柔らかい印象に変えるほか、リフトの取り付け部分に大きな変更を加えたものだった。従来は、リフト装置を収納するための大きな箱状の“出っ張り”があった。その出っ張りを失くし、浴



デザイナーが提案したデザイン案。リフト部分がフラットな案（右上）を採用

槽と同じ高さに揃えることで、「入浴する人が感じる圧迫感を取り除くことができる」と2人は説明した。ただし、そのデザインを実現するには、リフト操作の設計に手を加える必要があった。Caroは、視覚的にわかりやすいようにと、高さを浴槽面に揃えたフラットなデザインと、リフト周辺部分に高さが残る従来のデザインの2パターンを提示した。それを見た加藤さんは、「フラットなほうがシンプルで良い!」と直感。リフト操作の設計変更に取り組むことにしたのだ。

デザイナーの要望に応える

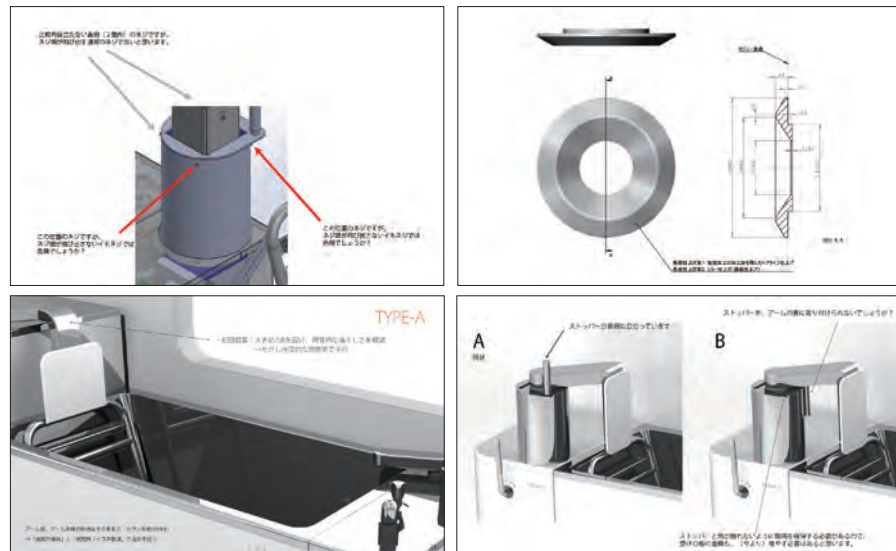
「デザイナーさんの要望には可能な限り応えたいんです」と加藤さんは言う。自分ではデザインできないからこそ、「デザイナーさんに力を存分に発揮してもらおうが、いいものができる」と考えるからだ。リフト操作の設計変更は、実はかなり面倒で困難な作業になった。高さを完全にフラットにすることは難しく、一旦は実現可能な範囲で妥協点を探った。しかし、その後も加藤さんは知恵を絞り続け、なんとかデザイナーの希望に近づけたのだった。

この取材の段階では（2018年8月現在）、製品リニューアルはまだ完成していなかったが、「今のところうまく進んでいる」とデザイナーとの協働に手ごたえを感じている様子。当初から希望していた新製品のデザイン開発もCaroに依頼し、製作を進めているところだ。これまでのフツラ製品のイメージを覆す新製品は、2018年10月の「国際福祉機器展」で披露される。展示ブースの装飾だけでなく、カタログ、製品ウェブサイトの制作も2人の力を借りて進めている。「介護用浴槽でデザイナーを起用した例は聞かないので、展示会での反響が楽しみです」と加藤さん。デザイン性が高まったことで、新たな販路の開拓も期待できそうだ。

実は、Caroのデザインを一番楽しみにしているのは加藤さん自身である。自分にはない発想を面白がり、2人のデザインに信頼を置いていることが取材を通して伝わってきた。「自分ではデザインの良し悪しはわからない」と加藤さんは謙遜するが、マッチング会でデザイナーとの相性を直感で探り当てていたと言えるだろう。デザイナーとのコラボレーションの成功の秘訣は、そんなところにもありそうだ。



座位式入浴装置（浴槽）の最終デザイン案



ディテール部分を調整し、デザインの精度を上げていった



10月の国際福祉機器展にて、新製品をお披露目した



「心身が万全ではない方々への『上質な体験の提供』」をテーマに、良い意味での「福祉機器感の払拭」を心がけました。表面的なスタイリングの整えではなく、内部機構のレイアウト変更も含め「装置の骨格からの最適化を目指した設計作業」を進めていただけたおかげで、デザインの理想形を追求できたと感じています。

株式会社Caro
山口英文さん



株式会社フツラ
代表取締役・加藤洋さん